

## 輸血副作用の発生頻度

輸血を受けた場合の副作用発生確率はおよそ以下のとおりです。  
(頻度は1人の供血者からの輸血を受けた場合)

大

### アレルギー・蕁麻疹・発熱

発熱と蕁麻疹はまれな副作用ではありません。

軽症 1/20～1/50  
重症 1/10,000

### 溶血反応

他人の血液を輸血すると赤血球が壊れて腎臓が悪くなる場合があります。

軽症 1/1,000～  
重症 1/10,000

### 輸血後肝炎

B型、C型肝炎

1/13万～1/2200万

### エイズ

日本でも報告例があります。

1/1,100万

### 未検査・未知の 病原体による感染症

? 可能性はあります

小

※異常を感じたらできるだけ早く、担当医、看護師にお知らせ下さい。  
症状にあわせて最善の対策をとって治療を行います。

輸血による合併症・副作用の有無を確認するために、輸血前と輸血2～3ヶ月後に  
肝炎ウイルス・エイズウイルスなどの必要検査を受けて下さい。

あなたの使用した輸血の情報を20年間保管します。そして、輸血による保健衛生上の危害の発生または拡大を防止するために、製剤の製造業者などに使用した記録を提供することや検査用の採血をお願いすることがあります。

添付資料2

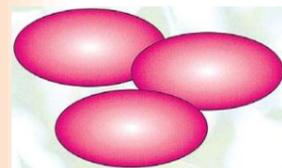
## 輸血を受けられる方へ

Q&A

## Q 輸血とは？

A 赤血球、血小板・凝固因子、血漿蛋白（血液循環を安定させる）などが不足したときにその機能を補うために行われます。

※血漿蛋白が不足したときは人の血液からつくったアルブミン製剤を使用します。



赤血球  
(酸素を運ぶ)



血小板  
(出血を止める)



凝固因子

## Q どんな時に輸血が必要になるのでしょうか？

A 手術の際の出血、貧血、血小板減少、凝固因子低下などです。

## Q 輸血を行わなかったときの危険性は？

A 出血性ショック、心不全など重症・致命的な合併症が起きる可能性があります。

※病気により異なりますので、詳しくは担当医から聞いて下さい。

## Q 輸血は安全なのでしょうか？

A たいへん安全になりましたが、完全ではありません。

## Q 輸血をさける方法がありますか？

A 貯血式自己血輸血ができる場合があります。患者さん自身の血液を予め採血して貯めておき、手術時の出血に備える副作用の少ない安全な輸血方法です。手術まで時間的に余裕があり、貧血がないなど、条件が合う人には非常に有効です。しかし欠点として以下のようなことがあります。

- 採血時に気分が悪くなったり、針をさしている手が痛くなったりすることがあります。
- 手術中出血量が多い場合は、やむをえず他人の血液を併用することがあります。
- ごくまれに保管中に破損・汚染等が起こり、使用できないことがあります。



## Q 輸血によって感染症等の健康被害を受けたら？

A 生物由来製品感染等被害救済制度というものがあり、医療費などが給付されます。本人またはご家族が、直接、医薬品医療機器総合機構に請求します。

※ただし、平成16年4月1日以降に輸血した場合が対象です。

〈お問い合わせ先〉

医薬品医療機器総合機構  
<http://www.pmda.go.jp>  
 0120-149-931 TEL 03-3506-9411

当院では輸血副作用を避けるため輸血は最小限にとどめ、適切な血液製剤を用いるように努めています。この説明書を読んでもわからないことがあったら質問して下さい。輸血療法について充分ご理解いただいた上で同意書に署名して下さい。

※輸血の必要性、副作用の可能性、他の手段があるかないかよく理解していただくことが重要と考えています。